
草原の歌に花言葉を

かがみ豆腐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

草原の歌に花言葉を

【Nコード】

N 6 2 7 3 W

【作者名】

かがみ豆腐

【あらすじ】

自らの意思により、奴隸としての環境から逃げ出すことに成功したカルル。彼は王都を目指して草原を渡ろうとするが、その途中で狼に襲われてしまう。

そんな窮地に現れて救ってくれた者が居た。騎士はアカシアと名乗り、王都の追っ手から逃れるために荷馬車を貸してほしいとカルルに懇願する。

助けられた礼と、さらに幼き日の再会に感激したカルルはそれに快諾するが、それはつまり逃げ出してきた村をもう一度通りかかると

いう意味でもあった。

しかし引き返してきたカルルたちが目にしたのは、焼け跡と化したかつての村だった……。

序章（前書き）

だれだって幸せになりたいのです。奴隷も、英雄も。

そのために逃げて、時には戦います。

それぞれが理想を求めて現実に向かうのはどこの世界も変わりません。

これも、そんな大海の中の一つのさざめきのような物語です。

誤字、脱字、わかりにくい描写や比喩表現など、おや？ と感じられた部分がありましたら指摘して頂けると幸いです。

序章

痛いほどに冷たい雨が降っていた。

そのおかげで人目はなく、家から出る者がいないのは幸いであった。誰にも見られたくない。

長い付き合いだった手枷は、足元に倒れる男の持っていた鍵束で外れてくれた。

家から運び出した荷物を手早く荷馬車に積み込むと、彼は長年世話をさせられてきた馬に囁きかけた。

「逃げ切れると思うかい？」

ぶる、と馬は嘶いた。彼が喋ると必ず相槌を打ってくれる。

「……行こうか」

彼が軽く手綱を打つと、ゆっくりと木の車輪が回り始めた。

草原の出会い

緑の海。……と言うそうだ。実際の海を見たことはない。

見渡す限り、視界には草原がどこまでも広がっている。

肌を焼く日差しは暑いくらいだが、風がなんとも心地よく吹いている。秋は近いらしい。

緑色をかき分けた目の前の一本道は朝からずっと変わらないが、景色の中で太陽だけが段々と低くなってきていた。

自分がいなくなったことで、今ごろ村は大騒ぎだろう。

だが、もうそんなことはどうでもいい。あんな村に縛られることがなくなり、ようやく自分は自由を手に入れたのだから。

ふと、空を仰ぐ。

青と白だけの空を、こんなにも美しく綺麗だと感じたのはいつ振りだろうか。

その天井が赤みを帯び、太陽が地平の境に沈んでからはあつという間に気温が下がり始めた。

そろそろ夜の準備をしたほうがいいのだろう。

なにぶん旅は不慣れなのだ。漠然とした不安があつてなかなか気楽にはなれない。

こんな時にはどうする、程度の知識があるだけで、具体的な経験というものはまったくない。

「冷えこんできたな……」

苦労してようやく火がついたところには、もう空と雲の判別が怪しいくらいにまで暗くなってしまっていた。

「これだけだもんな……。さすがに心もとないよなあ」

一頭の馬が余裕を持って引ける大きさの荷馬車。これにカルルのすべての持ち物が積み込まれている。

干した肉とライ麦の黒パンを齧って腹を満すと、カルルは毛布を掴んで荷台に上がり、寝転がって星空と向きあった。

「綺麗だ……」

それ以上の言葉はなく、そういえばと体を半分起こした。

「火、大丈夫かな。離れてるから燃え移りはしないと思うけど……大丈夫だよな」

焚火の火は獣除けになると聞いたことがある。薪はこの草原では貴重だが、なるべく火は絶やさないほうがいいだろう。

また横になって目を閉じた。すると耳が冴えるのか、風の音も普段より聞き分けられるような気がした。

「……………」

今のは何の音だ？

風の音にまぎれて一瞬、何かを感じた。音ではなかったのかもしれない。

再び体を起こし、月明かりしかない薄暗い草原を見渡した。

「……気のせい、かな」

結局何も見つけれられず、やがて睡魔に負けてカルルは深い眠りに就いた。

「……………」

今の音はなんだろうか。

さっきも同じようなことがあった気がする。

だが、確かに今しがた、獣の鳴き声のような……。

強く砂利を踏む足音。

次いで、獣の悲鳴。

「っ！」

カルルは跳ね起き、周りを見た。

誰かが、誰かの背中が見える。暗くてよく見えないが、何をしているのかはすぐにわかった。

ようやく目が暗闇に慣れてくると、三頭の狼がそこにいた。頭を低くし、唸り声をあげてその人物を遠巻きに威嚇している。

自分なら早々に腰が抜けてしまう状況なのだが、その後姿の人物は臆することなく凜と拳を構えていた。怖くはないのだろうか。

そして、あつという間もなく一頭の狼が飛び掛って　　思った時には、すでに引いていた拳でその鼻先を迎え撃っていた。

すごい。

思わず見惚れていた。

しかし次の瞬間に別の狼が襲い掛かり、その者の太ももに獣牙を喰いこませた。

「　　」

好機とばかりにもう一頭も続き、わき腹にぶらさがるように食らいつく。

悲痛な声に我に返ったカルルは、何か武器になりそうなものとはと荷台を見渡し、それを見つけた。

長剣。

護身にとカルルが前の家から持ち出したそれ。未だろくに素振りすらしたことがなかった。

……だからと言って、いざ実戦となるとこんなにも重く感じられるのだろうか。

これを持つて野生の狼に挑み、その毛皮を切り裂き、肉を断つ。怯えているのが自分でもよくわかる。

怖い。狼は怖い。そんなのと命を懸けて戦うのはもっと怖い。自分は何んと臆病なのだ。このままでは……。

「　　」

その結果にこそ、カルルが一番恐怖を覚えた。

「……う、……わあああああつ……！」

暗闇で鈍く光る長剣を握り締め、荷台を飛び下り、地面を蹴った。そしてすぐにその瞬間は訪れた。

突然の雄叫びに狼はカルルの存在に気づいたが、獣の性が簡単には咬みついた顎を離そうとはしなかった。獣の黄色い目がぎよりと彼を睨み付けるが、それに怯むほどの思考の余裕はもう残っていない。

ない。

たとえ剣としては使えなくても……！

ドゴツ、というどちらかといえば打撃のそれに近い音のあと、足に咬みついていた狼が白目をむいて倒れた。

まさか本当に倒せるとは、とカルルが驚いている数秒の隙にもう一頭の狼は離れてこちらの様子を伺っていた。

「……っ、君……」

「え？」

よく通る、澄んだ声だった。それ以上の感想を述べることに意味はなく、狼に目を向けたまま返事をした。

「だ……大丈夫ですか？」

大丈夫なわけがないだろう、とわかっていたがそう言うしかなかった。

カルルから詰めれば二秒か、狼からなら一瞬で詰められるであろう間合い。

不意打ちならばともかく、まともにやりあって勝てる可能性などない。

「くそ……」

「剣を」

「え？」

「剣を。私に」

その騎士はいつの間に隣に立っていたのだろう。

ちょうどその時、すうと月の光が雲の隙間から闇の中へと注いだ。

その美しさに子供のころに見た天使が光の中から降りてくる絵を思い出す。

淡い月光に映える長い金色の髪。短く切り詰められた甲冑は傷こそ少ないが使い込まれた歴戦の貫禄がある。そしてその凜とした翡翠色の双眸。……美しい横顔だった。

思わず息を呑んだカルルは女性の言葉を忘れてしまっていた。

「剣を。私にまかせてくれ。きっとあれを倒して見せよう」

我に返ったカルルは狼に注意をむけたまま慎重に剣を渡した。まともに使われたことなどない真新しい剣を見つめて、一言。

「少年。逃げることを恐れた臆病者のことを、人は英雄と呼ぶのだ」

その時、弾けるように鋭く　　狼が跳び上がった。

一瞬の出来事だった。

薄いマントを翻らせ、まるで舞踏でも踏むかのように騎士はそれを真つ二つに斬り伏せていた。

「……私は成り損ねたがな」

夜風に吹かれて

「うむ、美味しい」

さっきの貫録はどこへやら。

妙齡の女性特有の愛嬌に満ちた、至福の表情でそう感想を述べると騎士はまたひと口と狼の肉を頬張った。

聞けば名はアカシアと言うそうで、仕留めた狼の肉をたき火で炙っては口へと運ぶ彼女からはなんとも旅の経験が伺える。

「しかし危なかった。陽が落ちて草原をさまよっていると、遠くに火の光を見つけてな。私がたどりつく前に火は消されてしまったのだが、どうも獣の気配を感じたのだ。放っておくわけにもいかず、というわけだな。君が目覚めたのはそれからだ」

どうやら自分が寝ている間に狼に襲われかけていたらしい。それを彼女が助けてくれたということだそうだ。

「本当にありがとうございます。それと……、すみません」

「? どうしてカルが謝る」

「……もつと、……」

思い返すと情けなくて声がすぼんだ。

「ん? なんだ」

「もつと早く僕が出ていれば……アカシアさんは怪我をせずに済んだはずです……」

するとアカシアはふつと鼻から音を出し、水袋からひと口飲んで穏やかな口調で言った。

「カルのせいではない。それに君は私の手当てをしてくれた。それで十分さ」

小さな鎧の隙間から服を捲し上げるとわき腹が見えた。カルルの着替えを裂いた布が巻かれており、手当てをした時の柔らかい感触が脳裏に甦ったカルルは気恥ずかしくなって目を逸らした。

「ん。どうかしたのか?」

「い、いえ……なんでもないです」

「ふむ……。カル」

「は、はい」

「君は今、いくつだ？」

「へ？」

「年はいくつなのかと聞いている」

「年……は、十七です」

「私と三つしか変わらないな。君は敬語で話すのに慣れているようだが、もつと堂々としたらどうだ？」

「……そう、ですよ……。気を付けます……」

慣れているのではなく、今までそれしか出来なかった。だがしかしそれを彼女に言っても仕方がない。なにより自分について詮索を受けたくないのだ。

「まあ好きにすればいいさ。ところで」

「はい」

「私も荷台で寝ようと思うんだが……構わないかな？」

豪快な欠伸だった。せめて手で口を覆うくらい、と言っても恐らく無駄なのだろう。

「え……ええ」

「ありがとう。では、話の続きはまた明日な。おやすみ」

一方的に話を切ると騎士は荷台によじ登っておもむろに甲冑を脱ぎ捨て、寝転がるとすぐに静かになった。

「……ふう……むにゅ」

悪い人ではないのだろう。……たぶん。

ぱちぱちと燃えるたき火に残っていた木切れをすべてくべ、カルも眠ることにした。

「でもなあ……」

それがいくら小さな荷馬車で、多少の荷物が積んであるとはいえ、足を伸ばして寝るのには十分な余裕がある。

だが、そこに二人ともなれば話は別だ。

猫のように身を丸めて横になっているアカシアの隣には、カルルが寝るにはなんとも微妙な隙間が空けてあるのか、……それとも空いているだけなのか。

後者だった場合を考慮すると、ここに無理やり体を押し込むのは流石に遠慮するべきであろう。

「……寝るんじゃないのか？」

不意に目だけ開いてそう言われた。

「……もつと寄ってくださいよ」

「そうか、たしかに冷え込むからな。君がそう言うのなら」

「いや、ちよつと、逆です、そっちに詰めてくれって意味です」

「ああ、そういうことか。……ん、これでいいか？」

「はい。……それで、アカシアさん」

「なんだ？」

「さつきあなたが話の続きは明日って……。でも、明日すぐに出発するつもりなんですけど」

「ああ、私もそのつもりだ」

「いえ、ですから。いつ、その話をするんです？」

「？ 道中でゆつくりと話せばいいと思うのだが」

「……ああ、アカシアさんも行先は都の方角でしたか」

「なに？」

「え？」

「王都に行くのか？ カルは」

「え、ええ」

「……まいったな」

のそりと起き上がるとアカシアは頭を抱えた。

「あの……僕が王都に行くとまずいんでしょうか」

「いや。カルではない。私が……。ふむ、やはり今話し合った

ほうが良さそうだな」

話し合い、と言いながらもアカシアの口調と眼つきには穏やかではない色がこもっていた。

英雄

一体、どれほどの敵を切り伏せてきたのだろう。

ずっと生き延びるために必死だった。

自分を殺しに来る敵が、ただただ怖かった。

名も知らぬ相手に剣を振り下ろすうち、いつしか『戦神アカシア』などと呼ばれるようになっていた。

それが使命と信じ込むことで、命を奪うことにすら躊躇しなくなつたのはいつからだろう。

……半月ほど前、ある国で権力の頂点だった国王が戦死し、その後を王子が継ぐことになった。

まだ若い王子は腹に一物を抱えた老人の言葉を鵜呑みにしてしまい、その国の英雄として讃えられていた者を処分することに決めたしまった。

それ自体はあまり珍しい話ではない。

未熟な跡継ぎが王たる資質を養うために失敗を重ねるのは自然なことだ。

だから、王宮に仕える親友にそれを告げられた時も大して驚きはしなかった。ああ、やはりそうだったのか、と。予感はしていた。

今の王に弁明の声は届かない。

だが、こちらとてそんな理不尽に殺されるつもりも毛頭ない。

ならば逃げよう。自分にはこの生き方しかできない。

幸か不幸か、物心ついた時には家族はどこにも居なかった。しかし、自分が姿をくらましてその幫助を問われないよう、忠誠を誓ってくれた部下を裏切る必要があつた。

あの、何事にも生真面目だった部下。

自分の娘ほどの年齢の相手に、彼は気を失うまで殴られることも厭いとわなかった。

何度も殴打され、痛みを叫ぶのは部下のはずなのに、自分ばかり

が泣いていた。

そして、夜中に門兵が全員居眠りをしている隙を突いて門をくぐった。

寝言と言いはる彼らに独り言の別れと礼を残し、夜の草原へと馬を走らせた。

死神とまで謳われた英雄が、死刑を前にして逃亡。

後ろ指などいくら刺されても痛くも痒くもないが、同じ釜の飯を食った連中との別れはやはり辛かった。

逃走劇は成功したように見えた。自分自身、安心して馬に気を遣う程度の余裕も持ち始めていた。

だが、若い王は早く実績を作りたいかったのか、裏切り者の処分に特に力を入れて動いたらしい。

追手は予想よりもずっと早く追いつき、馬を射止められてしまい応戦を余儀なくされた。

戦いには勝利したものの、自分は剣と馬を失い、追手の者も死ぬ間に愛馬を道連れにした。

結局、自分の足で草原に行くしかなかったのである。

捕らえられれば裁判もなく処刑されるだろう。あつけないほどに生き残るには王国が滅びるか、追手の及ばない他の勢力圏まで逃げ切るしかない。

「アカシアさん？ どうしたんですか、急に黙って……」

「……カルル」

「はい？」

「頼む。どうしても私は王都から早く離れたいのだ。そのために……この馬を貸して欲しい」

これほど必死に人にものを頼んだのはきつと初めてだ。だが、言葉を濁すカルルに胸の奥が重くなる。

「……頼む」

「……」

そう簡単に頷いてくれるとは思っていなかった。だからといって

手荒な真似をするのは本当に最後の最後にしたい。

そんなことを考えているうちに、ふと疑問が浮かんだ。

逆に、どうして彼は王都を目指すのだろう。理由もなく人の頼みを無下にするような性格には見えない。よほどの目的があるのだろうか。

「……なあ、カル。そういえば聞いていなかったが、君はどうして王都に？」

「」

より一層カルルの表情が強張った。それは何か、彼の触れられたくないモノに触れてしまった反応。

「カル？」

「……僕は……」

俯いて服の裾をぎゅっと握り、消え入りそうな声でカルルは言いかけた。だが次第に顔が青ざめ、ふつと。

「カルルっ！」

少年は気を失って倒れてしまった。

奴隷

くさい。……嫌いなにおいがする。

朝起きて一番初めに抱いた感情は『不快』。昨日も、今日も、明日もずっと。

「いつまで寝てやがるっ！ さつさと羊の世話をしろガキ！」

なにも言い返さない。言い返せないんじゃない。無駄なことをしないだけだ。

「つたく……使えねえ奴隷だ。たまつたもんじゃねえよ」

愚痴を溢しながら男が馬小屋から消えると、カルルはもそもそと起き上がって背筋を伸ばした。

そして、ため息。

家畜の糞尿の臭いが染み付いた寢床が、今度は仕事場になる。

仕事場と言っても、給金を貰って稼いでいるわけではない。馬車馬のように使われ、怒鳴られ、腹を蹴られ、いつしか夜になっている。

好きでこんなところに居るわけではない。この村は人さらに遭った子供が連れてこられ、様々な用途の奴隷として取引されてから使役される。

そして自分と同じような境遇の者は皆、目が死んでいる。最初はなんとか脱出しようと頑張るのだが、口数が減り、次第に表情が消えていき、瞳から光が失われて虚ろな目をするようになっていく。

自我を失って本当に家畜と同じになる者。悲観して泣きながら体中を嚙んで死のうとする者。

今では見ただけで、その子供があとどれくらいで諦めるかがわかるようになっていた。

誘拐されて七年も生き長らえた奴隷は初めてだと、誰かが話しているのを聞いた。

きつと、自分は運が良かったのだ。

すごく嫌なことをされても、その気持ちを和らげてくれる『抛り所』が自分にはあった。

それのおかげでどんなに辛くても歯を食いしほることが出来た。このオカリナを胸に抱くだけで、思い出が嫌なものをひと時だけ忘れさせてくれる。

吹くと持つているのが知られるから、毎晩指だけ動かしたりして思い出に浸った。

名前も知らない少女の笑顔。

お互いに吹きあつては笑いあつた記憶。

それだけがカルルを認めてくれた。どんなに軽蔑されても、それがあつたから聞き流すことができた。

その夜は珍しく、酒に酔った家の主人が鼻歌を歌いながら馬小屋にやってきた。

それつが悪く言っていることは半分ほどしか理解できなかったが、どうやらこの家の奴隷は長持ちだから買い替える金がかからなくて羨ましいな、と誰かに言われたそうだ。それと酒の酔いも相まってか「褒めてやろう」などということらしかった。

……なんとくだらない。

最初はあまりの馬鹿馬鹿しさに、呆氣に取られて舌の回らない男の話を聞いていた。

だが、ふと気づく。そして短い葛藤のあとに覚悟を決めた。

カルルは立ち上がると両手を繋ぐ枷の鎖を男の首に巻きつけ、交差させながら思い切り締め上げた。男の反応は鈍く、思ってもみなかったほどに非力だった。

ろくに体を動かすことがなく、よく肥えた首の肉に錆を擦りつけながら鎖が深く巻き付く。

「あ……やめろ、やめ……おっ……やめえあ」

あのふんぞり返って大きく見えていた奴が、実際は自分よりチビの禿げ頭でしかなかった。

こんな奴に……っ!!

自分の両手首を背負い込み、肩越しに力任せに引き上げる。
カルルが本気を出しきるまでの間、気持ちの悪い静寂があった。
そして、蚊の鳴くような断末魔を耳元で聞くと、腐った木の枝が
折れるような感触を得たのだった。

「　っ！」

勢い良く体を起こし、隣にいた誰かに掴みかかっていた。

「はあっ……はあっ……！」

ようやく自分が寝惚けていたことを理解してアカシアの体から手を離れた。抜きかけた短剣を収めると彼女は言った。

「かなり、うなされていたぞ。怖い夢を見たんだな」

「夢……？　……いや、……夢じゃない……」

「どうした？」

「……」

忘れることはできるのだろうか。

今までに受けた苦痛はそのうちに薄れていくだろう。だが、一線を越えた事実決して消えることはなく、記憶の付箋として残り続ける。

「大丈夫だ。何も怖いことなどないぞ」

頭を優しく撫でられた。

「ところで……君に聞きたいことがある」

「ずい、と顔を寄せられて思わず身構える。落ち着いてきた呼吸が別の意味で乱れそうになる。」

「ハロツサ、という町を知っているか？」

「　　！　……………」

知らないわけがない。七年もの苦痛な歳月をそこで過ごしたのだから。

どんな顔をすればいいのか、そして自分は今どんな顔をしていたのか。悲しそうなアカシアの表情に申し訳ない気持ちが溢れてくる。

「……そうか。やはり、そういうことか」

推測が正しかった、とアカシアは声を落とす。

「君が気を失って、介抱しようとして見つけてしまった。その手首の跡は……見覚えがある」

「……………」

自分の手首を目でなぞった。外してから間もない鉄の枷の跡はまだはつきりと焼き付いたように赤く痣として残っている。

「君が都へ急ぐ状況も理解した。……だからこそ、頼む。君に降りかかる火の粉は私がすべて払う。だから」

「わかりました」

「……ん？」

「いいですよ。もう、おまかせします」

「カルル……？」

アカシアに背を向け、荷馬車から降りて夜の草原のしじまの向こうを見据える。

ハロツサから逃げ出したあたりから、薄々わかっていた。

都に帰ったところで、思い出を取り返すことなど出来はしない。

ましてや、あの時の少女との再開など夢に妄想もいいところ。

自分が木の枝で叩かれていた間に、少女は様々な経験をして喜怒哀楽を育み、素敵な女性になったのだろう。

あのひと時の幸福感を与えてくれた笑顔すら、実はもうおぼろげにしか思い出せない。

「……………」

オカリナの音色がして、ふり返った。

粗末な荷馬車の上、月明かりに照らされながらオカリナを吹いている者がいる。

それは彼女しかありえないのだが……そうではない、この吹き方を自分は知っているのだ。

いや、それ以前にこの旋律は……。

一息分ほどの演奏が終わると、彼女はオカリナを唇から離して呟いた。

「……不思議な感覚だ。すっかり忘れていたと思っていたのに、指が憶えている。耳が思い出して、また次の音が頭に浮かんできるとても心地が良い」

巧いか下手かではない。

その短い演奏にカルルは涙が溢れていた。

「ああ、……すまん、話の途中に。懐かしくてつい、手に取ってしまった。　って、おい、どうした？」

鼻声になるのが嫌で、黙って首を横に振る。

「大事な物だったのか……。悪かった」

「違うんです、そうじゃない……」

「では、どうしたと言った？　なぜ泣いている」

「あなたは……その曲をどこで？」

「　曲？　あ、ああ。今のはな？　私が幼いころに、ある少年から教わった曲なんだ」

ぐっ、と胸が詰まる。

そんなまさか。

「変な話をするが……私は戦災孤児でな。両親ともに失って、王都の孤児院で暮らしていたんだ。いつも一人で過ごしているような子供だったよ。同じくらいの年の子ともあまり遊ばないで、いつも形見のオカリナを吹いていたんだ」

戦災孤児。

王都の孤児院。

カルルにも懐かしい言葉だった。

夜中にトイレに起き出して、部屋に戻る途中でさらわれるまでは、カルルもそこで暮らしていた記憶がある。

「それで、私のことをじっと見つめている子供がいたんだ。新しく入ってきた子で、話を聞くとその子も私と似たような境遇だった」

その時はきつと、さぞかしモノ欲しそうな目で彼女のことを見ていたのだろう。オカリナを胸に抱えて警戒された覚えがある。

「聞けばその子も母親がよくオカリナを吹いてくれたらしい。その時にあの子から教わった子守唄、それがいま、私が吹いた曲なんだ」

「……その子とは、それから……？」

「ん、ああ……居なくなっただ。ある日突然、ぱったりと。迷子では……ないだろうな」

「じゃあ、その子の名前は」

「いや……。思えばなぜ聞かなかったのだろうか。あんなに仲良く……していたのに」

手に持った白い陶製のオカリナを見つめ、アカシアは思い返した。そうだ、あの時は貸したまま別れて、それであの子は居なくなっってしまった。あの時は形見を盗まれたと大泣きしたが……。

そういえばあのオカリナによく似ているなと思い、何となくそれを裏返してみた。

すると、見覚えのある一対の剣の紋章に目を奪われた。

とある貴族が戦での功労に剣の誉れとして王から授かった名誉ある家紋だ。

「……………え？」

それを見た瞬間、走馬灯のように記憶の断片が次々と甦った。

転んで危うく割ってしまいかけた時の傷や、それを隠そうと不器用な母が塗ってくれた、少し色の違う白色。

そして確信した。

「これは……」

間違いない。

これはあの時に失くしたオカリナだ。

「それをあの子に返すことだけを考えて、今日までなんとか生きてこれました」

「カルル……」

信じられないという顔でこちらを見つめる騎士は、あの立派な出

で立ちを忘れてしまうほどに幼く見えた。その姿に当時の記憶が重なり、再び涙が滲んできた。

「それはお返しします。何度助けてもらったかわからないけど……もう、無くて大丈夫だから」

「そうか……君はあの時の……あの時の……そうなんだな……？」

頷く。

言葉はなかった。口を開くよりも早く抱きしめられ、言葉が言葉にならなかった。

肩の後ろから声がする。目の前には暗い草原が広がっているだけ。何も見えないが、とても温かく心が安らぐ声だった。

「良かった……生きていた……生きてた……」

「……死んだと思ってましたか」

そう言つと、アカシアは肩を掴んで向き合う姿勢で言った。

「ばか、あんな小さな子供が急にいなくなったりしたら……、そう思ってしまうだろう……ばか」

「そんなに泣かれると……僕も困ります」

「……感情に我慢はしない主義なんだな」

鼻をすすりながら開き直つても様にはならない、とは言わずに聞いた。

「そうか……うん、良かった。よし、寝ようか」

「え？」

背を向けてひとりで荷馬車にもどると、アカシアは半分だけふり向いてバツの悪そうな顔で返事をしてきた。

「いやはやなんというか……恥ずかしくてな。人前で泣いたことなんて本当に孤児院以来なのだ。寝て、今のは忘れてくれるとありがたい」

思ったことをすぐに口に出す　　と言えばまあアレだが、ここまです直に感情を晒す人も珍しいのではないだろうか。案外、中身は昔のままなのかもしれない。

「なんだか想像してたのと違うなあ……」

しかし、思い出は思い出のまま美しくあればいいではないか。

運命は数奇なものと言う。その一端と納得すればそれまでのこと。親を失ったこと。誘拐されて売り飛ばされたこと。人を……殺めたこと。

ならば思い出の少女が狼を切り伏せる騎士になっていたくらい、なんということはない。

と、納得することにした。

「何の話だ？」

「いえ。なんでも。それより星が……綺麗ですよ」

「ん？ ああ、そうだな。まるで降ってくるようだ。すこし怖いくらいに」

「……………」

「くあ……おやすみ」

「おやすみなさい」

しかし残念なことにカルルにまどろみが訪れたころにはすでに空は白み始めていて、疲れもろくに取れていないと不機嫌に唸るアカシアには寝惚けて顔に蹴りを入れられた。

気まずそうに荷台で剣の手入れをする騎士という新しい荷物を乗せた荷馬車は向きを反転させ、新しい旅にカルルは手綱を打ったのだった。

おとぎ話

草原の外には、「水の草原」が広がっていると内地の者達は言った。

しかし船乗り達に尋ねると、彼らは内地に「緑の海」が広がっていると答えた。

大昔の、とある冒険家が残した有名な台詞である。彼の偉業を讃える演劇では必ず冒頭にこの言葉が挨拶代わりに語られる。

「海は見たことないけど……似てるんだろうなあ」

どこまでも緑色の大地の中、そこに川の流れのように敷かれた草の生えない道を荷馬車で行く。

この道を外れると方向を見失ってしまうため、決して離れてはならない。

何も目印のない草原を無闇に歩こうものなら、それは目隠しをして彷徨うのと同義である。すぐに自分が真つ直ぐ歩けているかどうか疑わしくなり、振り向きでもしようものなら今度は「前」がわからなくなる。

話では海もそんな感じらしい。

大きく違うのは草原には「道」があり、それさえ視界に入れておけば遭難することはないという部分だろう。

「ほんと、誰がこんな道を作ったんですかね？」

ねえ？ と御者台から後ろを振り返るとアカシアの大きな欠伸があった。御者台で馬の手綱を握るカルルからすれば、自称「見張り」の荷台でごろごろするだけのアカシアは暢気のんきなものだった。

「ふむ。退屈も過ぎると人は哲学的命題に挑むと言うが……」

「気分転換に、どうです？」

手綱をアカシアに示して言ってみる。もちろん交代してくれるとは期待していないが。

「いや。私はここで怪しい輩を警戒する任があるからな。操舵は力
ルに専念してほしい」

「警戒、ですか……」

草原の道には分岐こそあるものの、基本は一本道である。

「怪しい輩」が来るとすれば、前か後ろかだけなのだ。時々振り
返るだけしていれば、そう気に留めることでもない。

人の真後ろで堂々と爆睡は気が引けるが、不可抗力でのうたた寝
なら平気らしい。

見張りに意味がないと気がついていないフリをしているにしては、
どうも演技がうますぎる。

ならば本気で警戒しているのか、かなりの天然なのか。

心底どうでもいい推考だが、退屈のぎにはこのくらいがちょう
ど良い。

「まあ半分は名目なのだがな。この状況で見張りなんて必要ないの
はわかってる。それでも、もう半分は本気さ」

「……と言うと？」

「稀にだが、草原で旅をしていると『出会う』ことがある」

「ああ、おとぎ話ですね？」

親が子どもを怖がらせるのに使う、草原の悪魔のおとぎ話がある。

「はは。……そうだ、お伽噺さ。誰でも知っている有名な話。その、
原作とでも言うかな」

「原作？ あのお化けが、っていう話じゃないんですか？」

「いや。大体は同じだよ。そうさな、これはいつだったか……私が
初めての遠征に出た時の話だ」

雲がまばらな青空を見上げ、アカシアが語るのをシアンは背中
で聞いていた。

大地のほとんどが草原だとはいえ、地面の土が見えるくらい草の
浅いところもあれば、背丈をゆうに超える、それこそ何かが隠れて
いて急に飛び出してきてもおかしくないような場所もある。

その時は草の丈が腰くらいの、わりと深いところで野営をしていた。

馬車が三台は横に並べるくらい道が太くなっていて、そこに数十名の傭兵が火を囲んで夜を過ごしていた。

夜が更け、全員が雑魚寝をしているのが見渡せる位置にある馬車の上でアカシアも寝そべっていた。

すると、月明かりの下で誰かがむくりと起き上がるのが見えた。

（小便か……？）

ふらふらとおぼつかない足取りで歩くその者は、あと一歩で草原というところで一度立ち止まると雑魚寝の一団を振り返った。

それからやや間があつて、また前を向くと草原に足を踏み入れていった。

（道を見失うくらい離れるほど馬鹿じゃあないだろう……）

そう思つて瞼を閉じた直後、誰かが声を張り上げた。

「おい！ お前どこまで行くんだ？」

その声に起こされ、草原を歩く男の背中に視線が集まりだす。

「離れすぎだ！ 小便くらいその辺で出来るだろう？」

「それとも、何かいいモノでも見つけたか？」

一同に笑い声が響く。草原に現れる美女の悪魔のお伽噺に掛けた冗談だつたのだろう。

だがそれも、振り向いた男の一言に皆が凍り付いた。

「お前ら……あれが、見えないのか……？」

蒼白な面持ちでそう言つた男を、誰も冗談とは思えなかった。

「じゃあ、あれは……」

と、男は前に視線を戻した。

そしてすぐ、

「わ、うわ 来るな！ 離せ、このっ！」

「おいっ！ どうした、戻ってこい！ 戻ってくるんだ！」

何もないはずの場所で必死にもがく男に周りの声は届かないらしく、拳句にその男は道に背を向けて奇声を発しながら走って行って

しまった。

「……とまあ、その男が見たのがお伽噺の悪魔かどうかはわからないが、そういうことが実際にあったということだ」

「……………」

「どうした？」

「いえ……そういう話は苦手なんです」

「そうだな。私も大の男が悲鳴を上げながら走り去っていったのは恐怖したよ」

そっちかよ、とは言っても仕方ない。

その手の恐怖に対しての耐性が自分にはないだけなのだ。能天気と言えば失礼だが、そういうところは羨ましい。

「その時に具体的に何が起こったのかは理解を越えるが、似たような話を方々でも耳にする。それがお伽噺のそれなのかは置いといても、だ。万が一があるということが言いたかったのだよ」

「……………わかりました。それではまた見張りをお願いします」

「まかせてくれ。たとえ悪魔が出ようと君には触れさせんよ」

そう言われると複雑な気分だった。年上とはいえ女性に守られる立場というのは。

だが実際にアカシアのほうが上手^{うわて}なのだからどうしようもない。事が起ければ今の自分は確実に足手まといだ。

彼女がその気になれば荷馬車を奪って一人で逃げることにくらい容易^{やす}なはず。

（馬鹿だなあ……………）

こういう考えばかり思い付くのは、そういう大人しかない町で長く過ごし過ぎたからだろう。

「……あと、もう少しでハロッサに着きますよ」

「そうか。それじゃあ一旦、この辺で止めてくれ」

「！ はい」

馬に合図を出すと、数泊遅れて荷馬車が動きを止めた。このままハロッサの門をくぐれば、顔の知れているカルルは簡単に捕まって

しまつのは分かりきっている。

なにか、案でもあるのだろうか。

「このまま行けば君は捕まってしまうからな。一応、考えていたのだ」

「どうするんですか？」

まずは、とアカシアは自分の小さな荷袋を探り出した。はち切れそうなきゅうぎゅう詰めそれから引つ張り出したのは一着のローブ。

「君にこれを着てもらう。大きさはまあ、大丈夫だろう」

「え……これは？」

「私もいつまでもこの格好では不便だからな。王都の刻印もそこら中に入っているし。町に着いたらこれに着替えるつもりでいた」

「はあ……」

とりあえず相槌を打ちながら、カルルは茶色い女性用のローブを手につけてしげしげと見つめた。変装、ということらしい。いや、女装になるのだろうか。

「フードを深く被り、ずっと俯いていてくれればいい。別に気にする者がいても、連れは顔に呪いを受けていると私が言ってる」

「……。でも、この荷馬車は？ これだってあの村の物なんです。すぐに気付かれますよ」

「この村に来る途中で奴隷のような格好の子供に襲われ、仕方なく切り伏せて奪った。……という筋書きを考えているのだが、どうかな？」

先程の自分の考えが頭をよぎった。

「完璧です。それでいきましょう」

「よし、じゃあさっそく……」

アカシアの手がカルルの胸元のボタンを外しに掛かった。

「いや、まっ……自分で脱ぎますから！」

「怒ることはないだろうに……。ところで君はこれの着方を知っているのか？」

「着たことはないですけど……。被って腰のひもを縛るだけでしょう？」

アカシアは残念そうにため息を吐き、カルルが着替えるのを待った。

そして最後に腰のひもを結び始めた時だった。

「ああ違う、そうじゃないんだ」

期待して待っていたかのように素早くひもをカルルの手から奪う。「結び方ひとつを取っても流行り廃りがあるんだ。どんなに世間知らずの田舎の娘でも片結びはしないだろう」

「……そうですね」

世間知らず、という部分が引かかったが大人しく結び終えるのを見ていた。

「まあ、蝶々結びが無難かな」

形の整った綺麗な結び目に満足したように言い、カルルも彼女の意外な器用さに驚いた。

それから一步下がるとアカシアはカルルの頭の上から爪先までを無遠慮なまでにじっくりと見つめ、

「ふむ、悪くない。いや……むしろ良い。華奢な体と顔つきが幸いしたな」

妙な視線を肌に受けながら差し出された手鏡を見ると、何ともいえない気分になった。

「とても似合っているぞ」

「……勘弁してください」

「この町娘っぷりならいかに知った顔といえど早々に気づかれることはないだろう。さっさと通り抜けてしまえば大丈夫さ」

「……行きますか」

「ああ。それとカル、これを懷に」

「？」

寝ぼけて掴みかかった時に一瞬だけ見た短剣だった。

「いくらなんでも丸腰ではな。あの長剣よりはこちらのほうが使い

易い」

持ってみると短剣というよりは少し大きめのナイフといった印象だ。懐に携帯するにはこのくらいが良いのかもしれない。

「ありがとうございます。……あの丘の向こうにハロッサが見えるはずです」

頂上に生える木が親指ほどの大きさに見える丘を指差した。あそこの上に立てば、あの忌々しい村を見渡すことができる。

……無事に抜けられるだろうか。

そんな気持ちが顔に出ていたのかもしれない。

「なあと、多対一も私の得意分野さ」

「得意分野？」

「……いや、例えば悪かった」

バツの悪そうな顔をして訂正した。

「狼より強い人間はさすがにあの村にはいないだろう？」

と笑って見せる。それにはカルルも肩を揺らして頷き、御者台へと移るアカシアに手を差し伸べた。

その時は、丘の向こうに見える空が曇っているのはこれから雨でも降るのだろうと思っていたのだった。

おとぎ話（後書き）

感想を頂いたことでモチベーションが凄まじく上がり、自分でも驚きました。

モチベーションを燃料とすれば私の飛行機はもう低空飛行どころか常におなが削れているような状態なのでありがたかったです。

救済の名の下に

「何だこれ……」

丘の上から見渡した平原には、確かに存在していたかつての村は無く、代わりに焼け落ちてまだ薄い煙を立ち昇らせている村の跡が残っているだけだった。

近付く毎にその様子は鮮明になり、出入りの門から民家の倉庫まで、村のほぼすべての建物が無残にも焼き落ちていく。

カルルは呆然としながら村の中央の広場まで荷馬車を進め、そこでようやくこの惨状が誰によって引き起こされたのかを知ることになった。

「兵士……？」

鉛色の甲冑に身を包んだ兵士が十数人、どうやらこれは彼らの仕業と見て間違いないようだ。

「……貴女方は？ 先に名乗って貰えますかな」

馬に乗った真鍮色の甲冑を着けた男が言った。ひとりだけ色が違うのは彼が指揮官で、槍を持った残りが部下ということだろう。歩兵の顔は甲冑で見えず、表情がわかるのはその年配の男だけだ。

二人は荷馬車から降り、質問にはアカシアが答えた。

「名はアカシアという。王都アリシルより、特命を受けている。ここを通ったのはその道中だ。貴官らは何者か」

特命とわざわざ口にしたのは彼らも同じアリシルの兵士だと判断したからだろう、とカルルは思った。アカシアの甲冑は少し仕様が違うようだが、見た目の特徴が彼らのと良く似ているのだ。

それを聞いた指揮官らしき男は年相応の柔和な顔で驚いた反応を示した。

「貴女がアカシア殿？」

「随分とお若い」

「よく言われる」

なるほど、確かに話に聞く通りだが……

そつけなくそれだけ返すと、おつと、と思い出したかのように男が続けた。

「いやはや失礼。私はルイーグ、ルイーグ・コルト。我々もまあ……特命といえますかな。……して、そちらのお嬢さんは」

思わずびくつと肩が跳ねた。それを怯えさせたと勘違いしたのか、ルイーグと名乗った男はわざわざ馬を降りてこちらに歩み寄ってきた。

「おつと……。馬上から挨拶など失礼をお許しください。しかし決して、貴女を怖がらせようというのではありません。どうか、顔を上げて下さいませんか」

この年でその立場ならもつと高慢な性格を想像するものだが、ルイーグという男の物腰の低さは逆に相手を委縮させてしまうほどだ。別の意味で指揮官向きの人間性と言える。

しかしカルルは慌てて隣のアカシアを小突いて助けを求めた。

「ああ　ルイーグ殿、すまない。彼女は顔を人に見られるが怖いのだ。呪いを受けていてね」

あと数歩のところでルイーグが立ち止まったのがわかった。

「そうですか……。それはお気の毒に」

ルイーグは振り返ると焼け焦げた家々を見渡して語り始めた。

「軍属……。このような身ではありますが、人の心はまだ残しているつもりです。私はこれまでに赴いてきた地で、未来に傷を負った子供たちを多く見てきました。不幸な子供をひとりでも多く救済したい……。それが私の望みなのです。……この村がこんなことになってしまったのは確かに我々のせいに違いありません。我々が役目を果たそうとすれば、必ずそれを邪魔する輩が居ますから。争いは耐えないのす。それでもここのような、余所でさらわれた子供を奴隷として使うような村はすべて潰さなければいけません。若い世代が我々の世代の苦勞まで背負うことはないのですから。その世の中が実現するまで、どうか貴女にも強く生きていてほしい」

「ルイーグ隊……。聞いたことがある。『救済の兵士』、と名高い？」

「お恥ずかしい。そう言つて貰えるだけで」

「嘘をつくんじゃないよっ!!」

瓦礫の陰から飛び出した男がそう叫んだ。すぐさま歩兵に取り押さえられ、地面に組み伏せられて凶器らしき農耕具を取り上げられてもなお、顔だけルイーグに向けて吠え続けた。

「なにが『救済の兵士』だっ！ なにもかも奴隷の子供まで」

その叫びはルイーグの靴の爪先が男の鼻を蹴り潰す音で途絶えた。
「黙らせろ」

男の口に猿轡が噛まされる。

「ルイーグ殿。これはどういうことか」

アカシアの声にカルルすらぞつとする冷たさが宿る。

それに答えるルイーグの柔和な笑みも先ほどとは違って見えた。

「なーに、逆恨みでわけのわからぬことを叫ぶのはよくあることです」

その視線が見えない取引でも持ちかけているようだったのがカルルにも感じられた。

「……ひとつ、お聞きしたい」

「？ なんでもどうぞ」

「ここで『救済』された子供は？」

「それは……あそこの荷馬車の中に。我々の荷馬車です」

「人数は」

「……ひとりです。かわいそうに、他は皆、彼らの手によって。奪われるくらいなら殺してしまえと、凄惨な光景でした」

ルイーグに指を差され、兵士に縄で縛られた先程の男が暴れた。が、すぐに押さえられ、猿轡のせいで言葉も聞き取れなかった。

ルイーグがそちらを見ている隙にアカシアがカルルにそつと囁いた。

「カルル。君がここを離れる時に居た子供の人数はわかるか？」

「……十三人です」

「そうか」

アカシアは再びルীগのほうに目を向けて、

「ならば、その亡骸を確認したい。よろしいか？ ルীগ殿」

「……………ええ、よろしいでしょう。では私に付いてきてください。お前達はここで待っている」

「はっ」

槍を携えた兵士たちは威勢のいい返事とともに姿勢を正した。

ルীগの後に続いて歩く途中、アカシアが耳打ちしてきた。

（私から離れるなよ）

「え？」

思わず聞き返したがアカシアはそれを無視してルীগの後を追った。不穩に感じながらもカルルは少しアカシアに詰めて歩いた。

「子供たちはここで村の者に……………助けられなかったのが残念でした」

火の手を受けていないある建物の前に来るとルীগが立ち止まった。

三人が中へ入るとそこにはただ物のように並べられた、変わり果てた姿の奴隷の子供たちの姿があった。

「ひどい……………」

胃からこみ上げてくるのを堪え、カルルは惨状を目に焼き付けた。血の気の引いた幼い顔はすべて知っている。頭が真っ白になって倒れてしまいそうだった。

それに……………

ここが穀物の倉庫に使われていたことをカルルは知っていたが、なぜ殺される寸前の子供が倉庫に居たのかという理由は思い浮かばなかった。いくら労働力が大事だからといっても食糧と同じ場所に閉じ込めたりはしない。

そういえば、ここに入れられていた穀物の袋も見当たらない。

「どうやら、奴隷用の倉庫としてここが使われていたのでしょう。」

我々が踏み込んだ時にはすでに……」

ぞくり、とカルルの肌が粟立った。

アカシアを見るが、彼女は倉庫に足を踏みいれてからずっと横たわった亡骸を慎重に調べていてカルルには目もくれない。

そんな彼女が唐突に声を発した。

「ルイーグ殿よ」

「……なんでしょう」

「たった十人足らずの戦力で、良くこの村を制圧出来たものだ。こんな村では特に抵抗も強かつたろうに。おみそれした」

とは言いつつも声色は冷たいどころか棒読みに聞こえる。

感嘆の言葉が意外だったのか、ルイーグはこんなことを口にした。「いえいえ。ろくに戦闘の経験も武器も持たない者など、どれほど束になつても怖くはありませんよ。農耕具や、刃物ですら山鉈程度でした」

「そうか……」

「もうよろしいですか？ 済んだことは仕方が無いとはいえ、ここにいるのはやはり心苦しい」

アカシアに背を向け、ルイーグが倉庫の扉に手を掛けた時だった。

「ふざけるな……それが気高きアリシルの老兵か」

その声の怒張にカルルは竦んでしまった。

「ほう……なにか失礼でもありましたかな」

「ここにいる子供は全員、そなたらの槍で殺されている。山鉈や農具でこの特有の傷痕はあり得ない」

「……………」

ルイーグは何も答えず扉を開け、二人が外に出るのを待った。

それ以外に選択が無く倉庫を出ると、距離を置いて兵士に囲まれていた。

「私とて、かの英雄殿と事を荒げたくはないのです。……わかって

いただけますかな？」

微笑むルイーグは懷から拳ほどの良く膨らんだ皮袋を取り出し、近づいてきた。

「あの子供たちは、この村の者によって不運にも殺されてしまった。そうですね？」

「ああ、はつきりしたよ」

「それはそれは。良かった」

「切り捨てなければならぬアリシルの恥部を見つけることができたのだ。こんなに喜ばしいことはない」

その言葉に場の空気が凍りつく。

ルイーグが「おい」と言うと、微動だにしなかった兵士達が一斉に槍を構えた。

「貴女方に……救済の余地はないようだ」

「そうか。もとより追われる身なのでな。 カル、私のそばを離れるな」

それからカルルには何が起きているのかわからない時間がしばらく続いた。

突き出される槍の先端が見えたかと思えば、すでにその切っ先は切り落とされて地面に刺さっていて、足を払われたと思えば頭上を槍の穂先が真横に薙いでいたり。避けるどころか、本当にアカシアのそばに付いているだけで精一杯だった。

そして気がつけば、立って槍を構えているのもあと三人にまで減っていた。

兵士は均等に距離を取って三方向からこちらを囲み、一撃を繰り出す隙を狙っている。

対するアカシアは、肩で呼吸をしながら常に周囲を牽制している。その顔色には余裕が感じられず、もはや気迫だけで立っているように見えた。

アカシア自身だけならともかく、自分に向けての攻撃も数え切れないほど防いでいたのだ。そんな戦い方をして疲れないわけがない。

傍らでカルルは自らの無力さに歯を喰いしはるこ^どしかできなかった。

せめてもの騎士道

戦神アカシア。

どうせ戦意高揚を図った英雄の与太話、そう思っていた。

実際にはそこそ腕が立つ程度で、すぐにボロが出て力尽きると踏んでいたのは自分だけではないはず。それこそ、端から見ればただの小娘に鎧が付いた程度なのだから。

しかしこれはどういうことか。

手練れが槍で囲んでいたにも関わらず、未だに突くどころか穂先を掠めることすら出来ずにいる。

「じゃあらっ！」

一人が死角から仕掛けたはずの一撃も、体が躲かわしてから首がそちらを振りむくのだ。もはや後ろに目が付いているとしか考えられない。こんな奴は軍格闘術の師範にだっているようなものではない。

（騎士道精神に乗っ取りたいとこだけだな……。まず勝たなきゃいけないもんなあ。ルイーグ隊長なんて見てるだけだしよ……）

時には不合理なほど徹底した騎士道を貫き、大陸に名を轟かせる騎士に憧れていた。しかしとうとう自分はなり損ねたらしい。

「マルザ、エルム。噴流嵐攻撃だ」

「了解。じゃ、あつしが二の手でいいですか？ バラル副隊長」「了解。このエルムが三の手を務めさせて頂きます」

噴流嵐攻撃とは名前こそ派手だが、要するに打ち合わせがされた連携技である。その時の位置関係で担う役割が決まるのが特徴であり、生き残っているのが小隊の中でも錬度の高いこの二人で助かった。

それにアカシアは小娘まで守っていてくれたおかげでかなり消耗している。これなら肩の上下で呼吸を読むことも容易い。

女騎士が長い息を吐き、また吸い始める。その刹那を狙う。

バラルはアカシアを、マルザはローブの娘を狙って穂先を突き出

した。

正面から仕掛けた一の手、バルルの槍はやはり見切られ、剣で軌道を逸らされた。そこにマルザが二の手を加えて守りを崩す算段だが、今回はローブの娘でアカシアの手を煩わせる。

「カルルっ、どけ！」

予想通りアカシアは小娘を庇った。槍を剣で躲しながら素晴らしき身のこなしで回し蹴りの要領で小娘を蹴り飛ばし、マルザの一閃から守ったのだ。やり方は強引だが感嘆の息が漏れそうになる。

しかしこれは決闘ではない。ただの殺し合いだ。

連撃を防いで態勢を崩したアカシアに必殺の一撃を叩き込むエルムが三手目に控えている。

（さあエルム お前の錬度なら容易いだろう？）

しかし、その瞬間は訪れなかった。

「っ……」

バルルが目をもけた時、エルムは明らかに混乱していた。

槍を突き出す瞬間のために全神経をアカシアへ集中させていたのだ。そんな彼の目の前に蹴飛ばされた小娘が転がってきて彼の集中をかき乱し、判断を数瞬遅らせた。

ここまで狙ってやったのだとすれば末恐ろしい娘だ。

「っ、せああ！」

気持ちは分かる。が、もう 間に合わないだろう。

体勢を立て直したアカシアはその一閃の突きを紙一重で躲し、代わりに長剣を振り抜いた。

頭と胸の甲冑の隙間、首を確かに刃が通過したのを見た。

（エルム……っ！）

ここで雄叫びの一つでも上げながらこの槍をアカシアに突き出せるのなら、バルルは死神に魂をくれてやってもいいと思った。

（畜生っ……）

それすら叶わないのはこの一度突きだした穂先を引き戻さなくてはならず、その隙が命取りになるからだ。それはマルザも同じで、

もう間に合わないことくらい本人もわかっているはずだ。

ほら、英雄様がもう剣を振り上げてる。エルムの次はマルザだ。なら俺はあと一発くらいはかませるか。……エルム、マルザ。散っていった部下よ。

地獄に落ちても皆でまた馬鹿をやるう。

二人目の兵士も膝を折った。残るは自分のみ。目に映る騎士の背景には動かなくなった部下たちが横たわっている。

皆、いい奴らだった。

そしてすまない。最後の最期、自分はお前たちの仇よりも別のものを優先しようとしている。

やはりこれだけは許せなかった。

死を前にし、英雄を目指していたころの自分に後ろめたい気持ちを残したままになるのが怖くなった。

相手が誰であれ 腑に落ちないことには全力で抗わなければ人間は腐ってしまう。

賄賂を断った若き騎士が、それを思い出させてくれた。

「おおおおっ！」

「くっ！」

避けられない攻撃なら刺し違えるまで、と決死の表情を浮かべ剣を構える騎士に胸中で礼を言い、体を反転させる。

残りの人生すべての気力を籠めた、アリシル旗下第一特務ルイーグ隊副隊長、バルルの一投。

最期の槍に相応しい相手をめがけ、槍は投げられた。

「――」

その槍の穂先が先ほどアカシアによって切り落とされていたなかったなら。重心の位置が狂っていなかったなら……確実にそれは心の臓を穿っていたに違いない。

投げられた槍は、折れなかったことが奇跡に思えるほど深く深く標的の背後の壁に突き刺さっていた。

「てめえが死ねば……よかったんだよ……っ、クソ外道が……！」

あの世にてめえの居場所が

あると思うな……よ………」

投げた直後にアカシアの長剣を受けたバルは倒れ、その顔は最期までルイーグを睨みつけたままだった。

腰を抜かして無様にしりもちを着くルイーグの背後では、激しく壁に突き刺さった槍がまだ残響に震えていたのだった。

ソードブレイカー

「さあ、貴様で……最後だな」

剣をルイーグに向けてアカシアは声を振り絞った。

彼女の体力が限界に近いのはカルルの目にも明らかであり、それはルイーグとて同じだった。

「ふ、ふん。今の貴様に何ができる？ 確かに……部下をやったのは見事だ。だがこれで最期なのは、お前のほうだろうか？」

「……………」

剣をしきりに握り直しているのはもう手の感覚すら危いあやうのかもしれない。

「アカシアさん……」

情けない。自分には励ますことしかできないのか？

この人は女性だぞ？

大して年の変わらない男の自分が守られてどうする？

俺は……。

その時、がくりとアカシアが膝を着き、剣を落とした。

地面に手を着き、苦しそうな呼吸と歪む横顔。

「アカシアさん！？ だ、………」

大丈夫ですか、などと言えるわけがなかった。どう見ても大丈夫ではない。それに彼女がここまで苦しむことになったのは自分に責任があるのだ。

しっかりして下さい、頑張ってください。

そんなこと、情けなくて口が裂けても言えるものか。

「どけ、小娘。貴様に用はない。だが邪魔をするというのなら貴様も殺す。どけ」

ルイーグがすぐそこまで迫っていた。剣先を向けて冷徹な笑みを浮かべる男に返す言葉はない。

だが、隣でひたすら跪いている女性にはこんなことを口走っていた。

「アカシアさん。……あなたの言っていたことが分かった気がします」

恐怖心はとつくに振りきれていた。自分がやらなければならない時が来たのだ。

逃げるのがこんなに恐いなんて。

「……？ カルル、下がっている」

アカシアはなんとか立ち上がろうと踏ん張るが、やはり立てない。体が言うことを聞いてくれないのだ。

さつき最後の兵士を倒した瞬間に安堵してしまったことで疲労感が一気に押し寄せてきた。これは自らの未熟さに他ならないが、そのせいでカルルまで死なせてしまうのは堪えられないことだ。

「……やる気か？ 小娘」

しかしカルルはそんなアカシアの思いとは裏腹にルীগに立ち向かおうとしている。

アカシアや自分のためだけではない。彼らの手に掛けられた奴隷の子供の命はカルルにとって無視できる重さではなく、せめてもの手向けだ。この男だけは生かしておけない。

「そうだ。お前を……殺してやる。罪を数える」

ルীগの眉間に皺が集まる。無言で振り上げられた長剣をカルルは雲でも眺めるようにじっと見上げていた。

「死ねいっ！」

振り上げた位置から真っ直ぐにカルル目掛けて剣が振り下ろされる。

「カルルっ！」

アカシアが叫んだのが聞こえた。

直後、カルルの真横で空振りしたルীগがつんのめっていた。

「……………っ！？」

カルルの口元が吊り上がる。

よかった。

困惑するルীগの表情にカルルは確信を得た。

自分も戦うことができる。

「この……小娘があっ!!」

今度は斜めに薙いでくる。

ルイーグが剣の切っ先が届く前にカルルは後ろへ飛んでいた。

見える。

槍の時は慣れない前後の動きに対応できず、結局アカシアの足を引っ張ってしまった。

だが、その時からもしかしたらという気はしていた。

ある日は寒空の木の落ち枝で。またある時は家畜を従えるための皮の鞭で。

一度でも避けようものなら、百回悲鳴を上げるまで叩き続けられる。

痛いのが嫌だから、知らず知らずのうちにあまり痛くない箇所をわざと打たせるようになっていた。

その頃にはもう、相手の目線や体の動きから事前に見切ることを体得していた。

「カルル……」

そのカルルの反応と動きにはアカシアですら戸惑っていた。

「どういうことだ……!!」

同じように何度も何度も。

相手がどう斬ってくるのかわかる。

わかれば、避けられる。

感情にまかせて大振りな攻撃を繰り返した結果、ルイーグにも焦りと疲れの色が見え始めていた。

「小娘、貴様……何者だ!？」

唾を飛ばすルイーグを睨み続けたまま、カルルは懐からある物を取り出した。

「俺は……臆病者だよ。それでも、いつかは勇者になって大事な人を守るんだ。あと、俺は男だクソジジイ」

「なっ……」

アカシアから受け取った短剣を抜き払うと言い捨てた。

「今からアンタをぶつ殺すって言ったんだよ。村の人間はともかく……あの子供達を殺したお前は絶対に許さない！」

「ぬうう……！ 生意気な……っ、やれるものならやってみろ！」
飛び掛ってくる男に、以前カルルを痛めつけ弄んだ者たちの記憶が重なる。

一度でいいから、思いきり刃向ってみたかった。

「死いねええっ！」

「うるさいんだよ……！」

振り下ろしてくるルイーグに対し、カルルは下から切り上げる。
斜めに落ちてくる長剣の軌道を見切り、こちらの短剣の軌道をそれに合流させる。

それは正面から受け止めるのではなく、あくまで掠らせる程度の接触を狙う。そうすれば小さな軽い短剣でも、長剣の軌道を体から逸らすくらいのは容易いとだろうと咄嗟の反応だった。

「馬鹿なっ……」

言葉はそれが最後だった。

その時にはすでに大振りを外されてよろけたルイーグの脇腹に、カルルの短剣が深く突き刺さっていた。

声にならない断末魔のあと、男は倒れ、そして動かなくなった。

男の服で短剣を拭くと、その櫛状の刃を見つめた。

もう汚れは付いていない。借りものなのだから綺麗にして返さなくては、と無意識の行動だった。

だが、人の命を奪ったようなモノを返されて持ち主は何と思うだろう。それに気づいて、馬鹿らしくなった。

「すみません」

ようやく立ち上がったアカシアにそれだけ言い、黙った。否、彼女の言葉を待った。

人を殺した。その受け入れ方について彼女の答えに従おうと思っ

った。
「……カール」

拒絶か。

軽蔑か。

恐怖か。

それとも、何だろうか。

「よかった……」

抱き留められた。

いくら考えてもそうなる理由はわからなかった。

それでも、もう少しこの温もりに身を任せていたいと感じた。

「けがはないか？ 大丈夫か？」

「……けがはありません、大丈夫です」

「そうか……よかった。……では、早くここを出発しよう。王都の

追手もだが、この場を誰かに見られるのは避けたい」

するりと背中に戻っていたアカシアの手が離れた。

それでも、彼女が歩き出した後もしばらくその感触と残り香は力
ルルの胸の内を温かく満たしていてくれた。

ソードブレイカー（後書き）

物語の中に出てくるキャラクターたちのイメージをよりはっきりと決めようと思って最近そういう絵を描き始めました。

……でもこれがまた難しいものですね。時間をかけてなんとか描き上げて「……誰だおまえ」てな感じで。

それでも自分で作ったお話に自分で挿絵を付けられるようになったら素敵だと思っんですよね。友人には「人はそれを漫画家と呼ぶのだ」と突っ込まれましたが。

とまあ、そんなことをやってるから本編の更新がスローになってしまっている。最低でも一週間に一度の更新を守っていききたいと思う次第であります。

さらば因縁、吹けよ風

「お前……ビゲスのとこのカルルか？」

轡くちわを外された男の第一声。

カルルの記憶が間違っていないければ、この人物は以前カルルを使役していた禿げ頭の友人である。

「あなたと話すのは初めてですね……」

敬語を使うことにためらいはなかった。むしろ、この人は自分のような者達に良くしてくれていたほうだ。

「やっぱりか……。顔を見た時、まさかと思ったんだ。……、ビゲスは……お前が？」

静かに頷いた。

「そうか……」

そう呟いたあと、男は激しく地面に拳を打ちつけた。

「こういうことになるから……！ 俺は奴隷ってのが嫌だったんだ！」

急に立ち上がってカルルを睨みつけると、歯が砕けそうなほど喰いしばった。

「言わせてくれ。俺は……お前が憎い。殺したいほどだ。親友を殺されたんだ」

「……………」

言葉が出ない。何か自分にも言いたいことがあるはずなのに。この人の目を見ているとそれがわからなくなってしまふ。

「……………だけだよ」

肩の力が抜け、目を伏せて座り込んだ。

「俺は……お前の事情も知ってる。無理やり連れてこられて、あんな目に遭わされてよ。俺だってお前の立場ならきつと……そうしていたさ。なら……仕方ねえじゃんかよ」

その言葉にカルルは男の心情を察した。

「俺はお前が憎い。が……それとは別に、せめてこれからは幸せになつてほしいとも思つてゐるんだ。矛盾してゐるだろ。自分でもよくわからねえんだ。……笑つちまうよな」

下を向いて笑いながら、地面に水滴の跡が浮かんでいく。

自分が他の子供たちの仇を討ちたいと憤つたのと変わらない。この手で首を絞めて命を奪つたのは、自分にとって最悪の人間であり、そしてまた彼の親友だったのだ。

この人の苦悩を解決することはおそらく誰にもできない。

「カルル……。俺がこれ以上、おかしい考えを起こす前に……消えてくれ」

「はい……お元気で」

自分にできる最善の行動は、余計なことと言わずに立ち去ること。そう悟るしかなかった。

「達者でな。カルル」

軽く会釈をし、その場から離れた。

カルルとアカシアが自分たちの荷馬車まで戻り、手綱を打とうとした瞬間だった。

彼が息を切らして追いかけてきた。

「カルルー！ 村の西広場、あいつらの馬車に、子供がひとり乗せられてる！ こんな村からは一緒に連れ出してやってくれ！」

きょとんとしてからカルルは手を振って返した。

「……はい！ あなたもお気をつけて！」

彼はこれからどうするのだろうか。村は壊滅し、最後の生き残りとしてどう生きていくのだろうか。

親友の仇を見送る彼の胸中など、カルルにすべて察することなどできるはずもなかった。

ただ、もう後ろをふり返らないことだけを決め、彼の最後の頼みを叶えるため村の西側にあるもうひとつの広場を目指した。

「なっ……」

それを見てアカシアが驚愕したのも無理はない。開いた口が塞がらないとはこういうことだ。

それを初めて見た時はカルルさえそうだったのだから。

「……倉庫の中には居なかったから、きつとその最後の一人つていうのはコイツのことだろうとは思ってたんです」

「まさか……いや話には聞いていたが、信じられん。本物か？」
馬三頭で引く大きな屋根付きの馬車の中には、後ろ手に縛られて目隠しをされた子供が乗せられていた。

それはまるで収穫を迎えた小麦の穂のよう。黄金色^{こがね}の髪の隙間からちょこんと生えているのは獣の耳。成金趣味の贅沢な腰帯にしか見えない尻尾からも、同じ色の毛を生やしている。

「獣人……」

それだけ呟いたアカシアの隣をすり抜けて荷台へあがると、その少女に近づいた。

「ええ。獣人は希少ですからね。奴隷を商品として扱う奴らがついでに取引を持ちかけていくんですよ。物好きで欲しがる金持ちは多いらしくて」

感情の籠らない声でそう説明し、カルルは少女の目隠しを取った。

「カルにいちゃん！」

手を縛っていた縄を解くと弾けるように抱き着かれた、というよりはしがみ着かれた。

おいおいと泣きすぎる少女にアカシアが、

「……にいちちゃん？ 兄妹なのか？」

と二人の顔を見比べて言ったのでカルルは笑った。

「違いますよ。僕たちみたいな子供のなかじゃ自分が一番年上だったんで……教育係みたいなことをさせられてたんです」

そう言いながら涙と鼻水を塗りつけてくる頭を乱暴に離れた。

「ぐすっ……にいちちゃん。みんなが、みんなが……」

「言わなくていい。……もう大丈夫だから。お前は？ けがとかし

てないか？」

ふるふると首を振った少女を立ち上がらせると荷台から降りるのを手伝い、周囲を見渡した。

「このまま出発して、大丈夫ですかね……」

焼け落ちて骨組みだけになった家、瓦礫のように転がる人間。アカシアの目からすればさながら戦火の略奪にあったのと変わらない惨状だった。

「仕方ないさ。ルীগ隊、そして人買いとはいえ村を潰した。罪状がひとつたつ増えたところで追われる身なのは変わらない」

「いえ……そういうことじゃないんです」

「ん？」

「この村の人間はともかく……倉庫の子供たちはなんにも悪くないのに殺されて。せめて……」

カルルの言わんとすることを察したアカシアが先に言った。

「それはそうだ。……だが、残念だが墓を建てて弔ってやるだけの時間の余裕はないのだ。わかってくれ」

「……はい……。……行くよ、メーネ」

自分たちの荷馬車に乗り込むとカルルは手綱を握った。

村から草原に出る道を進みながら、痛々しい破壊の限りを尽くされた景色にかつての風景を重ねていた。

（あんなにいっぱい、人がいたのに……）

通りの端に倒れている者や井戸に上半身をつっ込んでいる者、折り重なるようにして倒れている者。その中に身動きするものは居ない。

「……先代の王が戦死してから、アリシルは腐敗の一途だ。ルীগもアリシル王が健在のころはここまで表立ったことはしなかったはずだ。これから同じような奴がまた出てくるだろう。……あの王子では、どうにもできないだろうな」

「そんな状況で……僕たちは大丈夫でしょうか」

思いのほかカルルが不安がったのを見て、アカシアは補足した。

「なに、他国の領土に入ってしまったえばそう簡単には追ってこれない。もしそれでも追手が掛かることがあるとすれば、よほど国同士が友好的か利害が一致している場合だろう。……まあ、隣国とはいえローデリアとアリシルは昔から疎遠な仲だ。ローデリアがわざわざ面倒事を引き受けることはないだろう」

「……そうですか」

地獄と化した村の出口がようやく見えてきた。

ハロツサの門を過ぎると目の前はまた草原になる。ここから見渡せる場所に町や村の小さな影はいくつか見えるが、王都から逃げることを考えると次の目的地は決まってくる。

「次はあそこだな。ここからだちょうど日が沈む方角だ」

そう言ってアカシアが指差した先には一際大きな町の影があった。カルルも話くらいは耳にしたことがあるのでそこが何かは知っている。

「あそこを超えたら、ローデリアなんですよね？」

「そう、国境の街ケルン。あの町の中にある国境を越えればこちらの勝ちだ」

ハロツサもそうだが、町や村から草原に出る道は木の枝のように分岐していることが多い。次の町の名前と矢印の記された立て札を頼りにそこから目的地に向かって伸びるものを辿るのだ。

「この距離だと二日、ってところかな……」

ぼつりとカルルが呟くと、メーネが背後の荷台から御者台に移ってきた。

「ねえ、にいちちゃん？ どうしてそんな力ツコウしてるの？」

「ん？ あ」

どつりでやけに下半身の風通しが良いわけである。

「いいじゃないか、良く似合っているのだし」

思い出したように居心地が悪くなつて着替え始めたカルルにアカシアが残念そうな声を上げた。

「そついうわけにはいきません。それに、この服は町に着いたらア

カシアさんが着るんでしょう？ その格好じゃダメですよ。なんでアリシルの軍人がこんなところに居るんだ って。国境を越えるなら『普通の人』にならないと」

「仕方ないのか……くそう」

「くそう、じゃないですよ。それと、メーネ」

「なに？ にいちゃん」

「その、にいちゃんっていうはやめてくれないか」

「どうして？」

丸い瞳にカルルが大きく映り込んで曇りひとつない眼差しが返ってくる。

「どうしてって……そもそまだな、どうして俺のことを兄ちゃんなんて呼ぶんだ？ そりゃあ面倒を見たのは俺だが、メーネより年が上の奴は他にも居ただろう？」

「だって……」

「だってじゃない。とにかく『にいちゃん』はやめろ。いいか？」

「……じゃあ、にいちゃんのことなんて呼んだらいいの？」

「……カルルでいい」

「カル、ル……」

「そう。次からはそう呼ぶことな」

「カルル」

アカシアの声だった。

「はい？」

「あまりいじめてやるな。大してこたわることもないだろう？」

呼び方くらい好きにさせれば」

メーネの頭を優しく撫でながらアカシアはそう言った。まるで妹をいじめた兄が母親に叱られている構図だ。

「……………」

どうも腑に落ちず唇を尖らせるが、アカシアにそう言われると押し通す気も萎えてしまった。

「……………わかったよ」

と観念した。

「ありがとう、にいちゃん！」

ぱあっと輝く笑顔でそう言われると気恥ずかしくなって目を逸らしてしまう。この感覚が好きになれなくてやめてほしかったのだ。

「……お兄、ちゃん」

「んなつ」

「冗談だ」

「……勘弁してください」

その日は背後のハロツサが手のひらに収まるくらいの距離まで来たところで日が落ち始め、荷馬車は止まった。

夕焼けでまだ空は明るい、そろそろ野宿の準備を始めなければあつという間に暗くなつて面倒なことになってしまう。

「明るいうちに出来ることはしておこう。まず一番に火、あと荷台には覆いの布を掛けておくんだ。食糧のにおいが災いを呼ぶことはざらだからな。夜露や雨よけにもなる」

アカシアがてきぱきと指示を出す中、カルルは荷台で眠りこけているメーネを起こそうとして止められた。

「そつとしておいてやれ。ずっと怖い目に遭つてたんだろう」

「……そうですね」

目隠しと縄で縛られていた状況を思い出せば、さすがにこの安心しきつた寝顔を覚まさせようという気は起きなかった。

そつと一番分厚い毛布を掛けてやり、アカシアと二人で火を囲む。……今夜は雲が多いな。月が隠れると昨日の今日でも明るさがだいぶ違う」

追われている身とは思えないくらい暢気にそう言うアカシアがカルルは羨ましかった。

「そうですね……」

自分とは言えば、ルイーグを刺した時の光景が稲光のように頭に浮かんで頭から消えてくれない。とてもアカシアのように雲の量を気にする余裕はなかった。

ずっとこのままなのだろうか。

言い表せない不安がカルルを静かに蝕んでいた。

「昼間のことを気にしているのか？」

はっとして焚火の炎から視線をアカシアにむけた。

それが顔色に出ていたのだと初めて気が付いた。

「……はい」

カルルが頷くとアカシアは少し考えた後、口を開いた。

「そうだな……お前にすこし、説教をしてやろうと思う」

「説教？」

予想外な単語に思わず聞き返すと、アカシアは「酒はあるか」と聞いた。

「……暖を取るための酒なら、少しは」

「それでいい、くれ。 ああ、カル。 お前も飲め」

「いえ、僕は……」

「飲めよ」

有無を言わさぬ態度に仕方なく、木のコップを二つ出した。

そして驚いたことに、一口を含んだ直後にはもうアカシアの頬が紅潮していた。

「あの、お酒……弱いんですか？」

「ん。 ああ、そうかもな……。 いや、そんなことはいい。 せつきょうだ、説教」

「は、はい」

改まって佇まいを直したカルルにアカシアは目を細めてコップを振った。

「いいか。 私が酒を飲むのは素面すめんで話すようなことじゃないからだ。 聞くのも同じだ。 飲め」

「……」

そういえば酒など一度も飲んだことが無かったのを、カルルは喉を焼かれてから思い出したのだった。

「……………っ！ー！」

「くす。それでいい」

アカシアは肩を揺らして笑っていた。

「いまからするのは価値観、モノの考え方の話だ。こんなこと、酒と一緒に話半分に聞くくらいがちょうどいいだろう？」

「……なんの……話ですって？」

水の入った皮袋から口を離すとようやく言葉を発した。

「カル、お前……ルイ　グのことを後悔しているな？」

「」

いきなり核心を突かれ、言葉に詰まる。

「だがそれでいいんだ。お前は間違っていないよ」

「え……？」

くい、とコップを傾けてから漏れた短い吐息には、カルルが思うよりも遥かに大人びた雰囲気満ちていた。

「……その罪悪の阿責に問われることすら忘れてしまう者もいるのだから。私みたいに、な」

その乾いた笑い声はカルルには真似のできないものだった。

「アカシアさんは」

「ん」

「……なんとも思わないんですか？」

アカシアの昼間の戦いぶりを見ると、彼女は人を斬ることに關して何の感情も抱いていないようだった。ただ相手が襲ってくるから払う、というふうに。

「まるで雑草でも払うみたいに。……僕にはそう見えました」

「雑草か、巧いな。……そうだ。鬱陶しい雑草は、鉈で払えばいい」

「」

「初めてが　一番辛かった」

「え？」

空になったコップを脇に置くと、アカシアは胡坐から片膝を立てて座り直した。その瞳には焚き火の炎が揺らめいている。じっと炎を見つめたまま、思い出すようにその口が動く。

「戦場いくさばに出て、相手が私を殺そうとしているのを肌で感じたから、怖かった。死ぬのは想像ができないから、本当に怖かったよ」

運命の悪戯と偶然が重なった、初めて戦場で相手を殺した記憶が蘇る。

胸に深々と刺さった剣を、震える手が握っている。それが自分の手だと信じたくなかった。

「二回目は　その半分だった」

その時は復讐に駆られて。大好きだった友の仇を討てるなら、自分はどうなろうと知らない。だから初めから殺すつもりで相手に切り掛かった。その時の自分はまるで獣か人外の何かだった。

「最初と二回目でも、やったあとの受け止め方が全然違った。二回目の時は、『　ああ、またやってしまった』と。立ち直るのがだいぶ早かった」

今まで幾度と喉に引っかかっていた言葉が、ついにカルルの口から出た。

「……僕も、二人目です」

「ああ、らしいな」

「　え？」

驚いてアカシアの顔を見た。深い闇の中までも見通せそうな妖しい翡翠の瞳がこちらを覗いている。

「昼間、そんな話をしていたらう？」

「あ……」

そういえば、ハロツサの最後の一人がアカシアの前でそのことを口にしていた。

「ビゲス……と言ったか。お前の雇い主か？」

「……ええ。そうです」

「それも後悔しているのか？」

「……」

わからなかった。

ビゲスが酔って馬小屋にやってきたあの時、もし何もしていなか

つたら、村を逃げ出していなかったなら。

間違いなく、自分はルイーグ隊によって殺されていた。

それに、ビゲス本人に対しての憎悪もかなりあった。客観的に考えてもあれ以外の選択は無かったはずだ。

「たえ間違ったことでも……。たえやり直すことが出来たとしても……。僕は同じことをすると思います」

そうするしかなかった。

それでも、やはり間違っているんじゃないか、罪を償わなくてはいけないんじゃないか、そんな決着の付かない葛藤を続けていた。だからアカシアにお前は間違っていないと言われて救われた気がしたのだ。

「死ぬほど思い詰めるも、雑草を刈るも、それはお前次第だ。カルル」

「……はい」

「もしお前が間違っていて。その結果として周囲が敵だらけになったとしても。私だけはなにがあっても味方でいてやる。それを忘れるな」

酔っているからだろが、これほど齒の浮く台詞をよくも面と向かって並べてくれる。

それでも。

「ありがとう……。ございます」

こんなにも体が暖かい。嫌なものが氷のように溶けてどこかへ流れて出ていってしまったかのようだ。

「……カルルは泣き上戸だったのだな」

ぼろぼろと膝にこぼれる涙が止まらない。もちろん、酒のせいなどではない。

「……もう眠るといい。明日も早いからな。ゆっくり眠れば、気持ちも落ち着く」

優しい声にカルルは涙を拭くと、「おやすみなさい」と残して荷台に上った。

すやすやと寢息を立てるメーネの邪魔にならないよう体を端に寄せ、毛布から顔だけ出して曇った夜空を見上げた。涙で詰まった鼻を冷たい夜風が抜けていった。

しばらくは焚き火の燃える音とアカシアの気配を聞きながら、メーネの頭を撫でていた。気が落ち着いて眠くなるまでそう時間はかからなかった。

さらば因縁、吹けよ風（後書き）

小説というか物語を描いていると、自分が創造したキャラクターに教えられることがあります。

自分がタイピングしているはずのセリフや思想に、なるほどお………
って感心してしまうことが一作品に二つ三つほどあるのです。それがこの作品でどのくらいあったかは忘れてしまいましたが。なにぶんこれを書き上げたのはもう一年も前になりますから。

あらすじはこのへんまでですけども。物語はむしろこっからが本番
っす

頭上の鳥

とても恐ろしい夢を見た。

内容は思い出せない。汗ばんだ額を拭った。

自分が何か取り返しをつかないことをしてしまい、追いかけてくる恐怖からひたすら逃げ続けるという夢だった。

あと一歩で恐怖に肩を掴まれる　というところで救いの手がどこからともなく差し伸べられ、その誰かの手の温もりにいつしか恐怖は消えていた。

「……………」

カルルが半身を起こすと、自分とメーネとの間に毛布が一枚余分に敷かれていた。

そこにさつきまでアカシアが寝ていたのだと気付くのにそう時間はかからなかったが、その本人はどこへ行ったのだろうか。

「　ん、最後はメーネか。カルも飲むか？」

荷台の外から声がし、見ればアカシアが火を起こして何かをしている。芳ばしい匂いが湯気とともに鼻腔をくすぐり、どうやら珈琲を淹れているようだ。

「昨夜の火種がまだ残っていてな。道具だけはいつも持ち歩くようにしているのだ」

彼女の荷物がやけに多いのはそのせいだったらしい。見慣れない形の真鍮の鍋に三脚、粉末に挽いた珈琲豆が詰まったガラスの瓶。それらを見る限りでもかなりのこだわりを感じられる。

「いただきます……………」

渡されたカップの温もりがじんわりと手に優しい。そういえば随分と久しい嗜好品だ。

一口啜り、その味に思わず目を見開いた。

「…………甘い！　砂糖が入ってるんですか？」

「私は苦いのはてんでダメでな。そのほうが美味いだろう？」

「でも砂糖って……すごく高いでしょう」

本当に飲んでも良かったのかと疑うほどだ。

少なくとも砂糖は一介の騎士が給金で買うには高すぎる代物である。それに高価な砂糖は蜂蜜のように甘味料としてではなく、万病に効く薬としての認識のほうが強い。珈琲に混ぜるなど富裕層にしか許されない飲み方だ。

「なに、出てくる前に屯所から失敬したものだから心配するな。それに甘いものは頭が冴える。歯を磨かなくてはならないのが難点だが」

「そう……ですね」

アカシアの話をもとも聞いていられないほどに砂糖入りの珈琲は美味かった。

「……そろそろ夜が明けるな」

日の出前のまだ薄暗い時間だが、白み始めた東の空に目をやると不思議な光景を見ることができる。

限りなく黒に近い深緑色の大地の向こうから、細い陽光の筋が空に打ち上げられ始めた。

太陽が完全に地平線から顔を出すまでの短い時間、草原の陽の光を浴びている部分が金色に輝いて見える現象が起こる。

それを草原に住む者は「大地の目覚め」と呼ぶ。

まるで太陽から風が吹くように金色の光が彼方から草原を染め上げていき、その神々しいまでの美しさに息を呑むのは、見慣れた力ルルとて変わらない。

「……綺麗だったな」

「はい。ほんとに一瞬ですもんね」

二言三言を交わしている間も無くそれは終わった。

名残惜しく草原を見渡しても、そこにはもう朝の青空の下に映える緑色が一面に広がっているだけだ。あの闇の中を広がる金色の間は、見間違いだったのかと思うほどに儚い。

「諸説は色々あるのだから。朝露に陽光が反射するせいだとか、^{しよせつ}

精霊の仕業だとか。もつとも、真実がわかるのはまだずっと先のだろう。そう、私は思うよ」

そう言っただけの地平の彼方を見据えた騎士は、自分の知らない時間で何を見てきたのだろうか。

遠い。

そう感じざるを得ない。

「なあ、カルル？」

「はい？」

「長い時間会わなかった。今の私はカルルからどんなふうに見えているのか察することができない。私は……変わったのかな」

それはどうでもいい話をしているふうではなかった。ただ、真剣というにはその目はあまりにも穏やか過ぎた。

自分に向けられた双眸には曖昧な返事も、その場しのぎの綺麗言も彼女を傷つけてしまうだろう。

カルルが幼き日を思い返せば、知らず内に口調も当時のものへと戻った。

「……七年前のあの頃としか比べられないのは仕方ないけど、確かに君は変わった。……それに俺も変わってしまったから。それはもうどうしようもないことじゃないか。だからさ、それは悲しむんじゃないくて、良い意味で受け入れてしまえばいいと思う」

その言葉を噛み締めるように視線を落とし、ややあってからアカシアは口を開いた。

「……そうか。カルルがそう言うのなら、きっとそうなんだろう。……すまない、おかしいことを聞いて」

「いや。相談に乗るくらいしか……僕にできることはありませんから」

そう言つたアカシアは少し不満そうな顔をして、カルルも気がついた。

「あ……」

「今の話し方でよかったのに」

「……………すみません」

「ほら」

「……………」

今まで喋る時には敬語しか許されなかった生活のせいで、すっかりそれが癖になってしまっていた。

ミーネのような例外もあるが、大抵の相手には意識しなければいい敬語で話してしまう。

礼儀正しいと言えばそれまでだが、それでも度が過ぎているのは確かだ。

「……………いつかは治せよ？」

「は……………ああ、わか……………った」

やれやれ、とため息を吐くとアカシアはコーヒーの道具を片付け始め、それを見てカルルもそろそろ　ミーネを起こそうと荷台によじ登った。

「ミーネ」

「……………」

「起きろ」

尻尾だけがぱたりと動いたが、起きる気配はなかった。

「ミーネ」

声を強くして呼ぶ。今度はふさふさの獣の耳がぴくつと撥ねた。

「ん、んんん……………」

眩しそくに目を擦りながら仰向けになり、ようやく言葉を発した。

「……………にいちちゃんおはよう」

「おはよう。ほら、顔を拭け」

こちらまで眠くなってきたような顔に、水を含ませたタオルを渡してやる。

「……………？」

その意味が分からないのか、渡されたそれをぼーっと眺めていたので、結局取り返してカルルが拭いてやった。

「ったく、昼間の元気を少しでもこっちにまわして欲しいもんだ」

朝が弱いメーネの世話をさせられていた頃もよくこうして顔を洗ってやったものだ。

「カルルよ」

焚火の始末を終えたアカシアが荷台に荷物を乗せてよじ登ってき
た。

「とりあえず早いうちに出ておこう。朝飯は道すがらでも食べられるからな。多少あわただしくてもケルンに着くのは早いほうがいい」

「そうですね。じゃあ、先に出発だけでもしましょうか」

草を食んでいた荷馬が出発の気配を感じたのか食事を止め、カルルは足元の水桶を脇に抱えて「行くよ」とだけ言って顔を撫でてやった。

手綱を軽く振ってやるだけで荷馬車はゆっくりと動き始めた。朝の冷たくも清々しい空気を胸に吸い込み、大きな欠伸と共にまた一日が始まったのだった。

「もうっ、触んないでって！」

「む……よいではないか。少しだけ、な？」

背後のやり取りに耳を傾けて笑っていたのも最初だけだ。

太陽が真上に来てもまだ諦めないアカシアと、耳と尻尾を触られないよう守り続けるメーネの攻防戦。

人のそれよりかなり上に付いている尖ったふさふさの耳。服の裾からはみ出した腰巻のような尻尾。それらが本当に体の一部として機能しているのを見たアカシアが、触らせてくれと言いつ出したのが
ほったん
発端だった。

「や、ちよっ……にいちちゃん、たすけて！」

肩に衝撃を受けて振り向くとメーネの顔があつた。その後ろにはアカシアが。

「だから少しだけだと言っているではないか。減るものでもないのだし。ほらほら」

「この人もいじわるする！　メーネ嫌だつて言ってるのに　や、やあああああつ」

「素晴らしい……！　これが獣人の尻尾か、なんという心地良い肌触りだ。そこいらの毛皮とは比べ物にならない」

「さ、触らないでえ……」

へなへなと腰砕けになるメーネに襟首をひっぱられ、ようやくカールが止めに入ったのだった。

「アカシアさん。お昼なに食べます？」
「む」

食欲が好奇心を押し出したらしい。尻尾を放すと、代わりに水の入った袋を引き寄せて栓を抜いた。

「そうだな、私は腹が膨れればなんでもいいぞ」
「……なんでも、ですか？」

「ああ。滋養が高いに越したことはないが。とりあえず体が動けばなんでも食べる」

恐らくアカシアの言う「なんでも」と自分のそのの範囲が格段に違うことに気付いてはいたが、やはりからかってみたい気持ちに負けた。

「よし、メーネ。昼飯はあれにするか」

「え？　なに？」

「ほら、だいぶ前に飯が三日くらい抜きだった時。掘り返してさ……食ったろ？」

「え……え　？」

御者台で足をぶらぶらさせて座る少女の表情が凍りついた。

「なんだ？　雑草とかか？　あれは当たり前外れがあるがいけないこともない」

「ちがうもん……」

アカシアのその笑いもメーネの一言にぴたりと固まった。

「……ミミズ」

「ミ……」

からからとカルルは笑う。

「あれって栄養はすごくあるみたいで。味と見てくれは最悪ですけど、食いつなぐことはできました」

「食べたことが……あるのか？」

驚愕するアカシアにカルルは苦いものを浮かべた。

「仕方がなかったとはいえ……あまり思い出さたくはないですね」
「……………」

アカシアの絶句に満足し、カルルは食料の麻袋を引き寄せた。

「はは、冗談ですよ。どうせ干し肉とパンくらいしかありませんし、ケルンに着いたら野菜を買いたいですね」

そう言って干し肉を取り出して口に咥えると、その袋をアカシアに差し出した。

「なんだ、冗談か……いやおかしいとは思ってたんだ」

安心して袋を受け取るとその中をまさぐった。

「そうだな、いくらなんでもミミズは食べられないよな」

「え？　ああ、ミミズの話は本当です」

「……………」

騎士は再び言葉を失ったが、それに気にせず話を変えた。

「でもまさか、本当にこんなものんびりと空を拝められる日が来るとは思いませんでしたよ」

重圧から解放されて、その分余計に感動に回すことができる。

それがこれほど素晴らしいものだとは思わなかった。

「ああ……そうだな　ん？」

つられて空を見上げたアカシアが目を細めた。

「どうしました？」

「あれは……………」

指さした方向に目を向けると、空に一羽の黒い鳥が飛んでいる。

カラスではないようだ。

「……………」

カルルが御者台に立ち上がって目を凝らしたのはその鳥に違和感

を感じたからだ。

何かが変だ。直感、あるいは本能のようなものがそう告げている。

「怪鳥だ。……背中に兵士が乗っているな。おそらく私の件をケルンの国境警備に伝えようとしているのだろう」

「怪……鳥？」

言われてみれば確かに、人のような影が鳥の背中にちらりと見えた気がする。ともすればその鳥は相当な巨体ということになる。

「あんなのがいるんですか……？」

「私も見たのは二回目だ。馬より早く、尚且つ安全に情報を運ぶことができる。怪鳥自体が希少な生き物だからやりあうことは無いだろうが、……まずいことになったな」

その鳥が飛び去っていったのは荷馬車が目指すのと同じ方角だ。

「……このままいくしかないだろうな。進路を変えるにしても、どうせ国境沿いの町にはすべて連絡が回っているだろう」

重い空気の中、カルルが口を開く。

「でも、国境の向こうのローデリアはアリシルとそんなに仲が良いわけじゃないんでしょう？　いくら頼まれたからといって、ローデリアが協力するとは限らないんじゃない……」

言っていて不安を抱いた。国と国との関係がそれほど単純なものなのだろうか、と。

「……。特に関係がないからこそ、これから優位な立場を築いていくための材料として貸しを作ろうとするのはあることだ。樂觀的になり過ぎていたかもな……」

この時カルルは初めて、自分たちが追われている『国』という存在の大きさを理解した。

頭上の鳥（後書き）

先日、久しぶりにラノベを最後まで読み切れました。

「とある飛空士への夜想曲」という、先月映画が公開した「」への追憶」の後日談にあたる上下巻二冊です。

高校時代に「追憶」を読んで「これ以上のは無いだろう」なんて偏食野郎は思っていたのですが、「夜想曲」でまた同じことになったわけ。

内容はもちろんのこと、尊敬せざるを得ないはその参考資料の多さでした。

主人公のおそらくモデルとなった坂井三郎氏関連の著書に始まり、世界観などにも多くの書籍を参考にして物語のリアリティを追及する様は物書きの手本として、私もかくありたいと思いました。

ある面白そうな話が浮かび、それをすぐに描き始めてしまうのではなく、プロット以外にも詳細な設定を描かなければ面白そうだけで終わってしまうという失敗を何度も繰り返した私には彼の姿勢は理想だったわけです。

国境警備隊

ただそこに人が群れているだけならば、それは獣とさして変わらないだろう。

だがそこに『統治者』という立場が成立し、その集団を『国』として纏めると群れは大きく変貌する。

国となった人の群れは、互いを守ることで自分を守るようになる。群れが大きくなればなるほどそれは強固に、安全に。

そうやって一人の力では打ち勝つことができなかった自然の災害や野獣の脅威から身を守ってきたのである。

ところが、そんな無敵にも思える国という存在にも、ただ一つの天敵があった。

自分たちと同じ人間の集団、国である。

それはいつの世も複数で決して一つには統合しえない。

そして互いに敵対していても我が身に利益があるのなら一時的にも手を貸すというのは、人が獣以上に獣らしいことを裏付ける一面ではないだろうか。

「ほう、あの英雄が。しかも、このケルンに現れるかもしれない」と

わざとらしく驚いたのは、本当にこういう『事件』が久しぶりだったからだ。

母国ローデリアから派遣され、この町で警備を担うようになってから自分はもうすぐ二年になる。平和すぎる日常からかけ離れたそれは何とも刺激的な話だった。

「ええ。どうかご理解とご協力のほどをお願いします。……では、文書は確かにお渡ししました。私はこれにて」

「おや、もうですか？ アリシル王からの使いの方にお茶の一杯も

出さないで帰したなどあつては、国境警備隊の礼儀を疑われてしまいかねません。美味しい茶があるんですよ」

「……この他にも回らなければならぬので、申し訳ありません。では、ケルンの茶は美味かったと伝えておきます」

終始無表情だった若い兵士が、一瞬だけふつと薄い笑みを見せた。いかにも高貴な見た目の彫金の装飾が施された鎧を着た兵士は、おそらく伝令兵の中でも一等の階級の者なのだろう。怪鳥といい、いくらローデリアの膝元の警備隊とはいえ、馬鹿丁寧過ぎるのは確かだ。見栄を張っているのか、ただ真摯なのか。

アリシルの王はまだかなり若いと聞く。若さ故の誠意かもしれない。それとも、誰か悪い大人に耳打ちでもされているのだろうか。

飛び去ってゆく怪鳥を見送りながら短い顎髭を擦った。

それにしても、ほんの数年前には戦神とまで謳われた者を捕えるとはかなり無茶を言ったものだ。自国の英雄の処分こそ聞かない話ではない。……だが、それに他国の力を借りようなどと。大抵は意地でも身内だけで処理する『不祥事』なものなのだが。

「自慢の英雄が落ちぶれていることをわざわざ他国に教える理由はなんだ？ 恥は隠すものだ……」

今のアリシル王の判断にはどうも疑問を抱く。アカシアがもし本当にこのケルンに現れたものならば、その見極めに利用させてもらうのもいいかもしれない。

隊舎に戻った彼は開口一番、部下にこう言い付けた。

「クラストを呼んでくれ。こういうのはあいつのほうが得意だ」

怪鳥の一件以来、カルル達は特に何事もなくケルンへの道を進むことができていた。

早馬に刺客を乗せて王都から追っ手をかけたとしても、振り返ちに遭うばかりではいずれ見失ってしまう。ならば怪鳥で情報だけでも先回りさせて待ち伏せしてはどうか。

というのが、アカシアが予想したアリシルの作戦だった。

「本当に……不気味なくらい平和ですね」

「そうだな。ここまでくると今度はケルンに入るのが不安になる。さつきまではそこに着けば安泰だと言っていたのが」

アカシアの予想が当たっていたとすれば極端な話、単騎で彼女に勝てる刺客はアリシルにはおらず、それを王も理解しているということになる。

そんな猛者がこのか細い娘だというのはだからカルルは今だに違和感を感じてならない。

野生の狼を切り伏せ、槍を持った兵士に包囲されても生き延びることが一体どれだけの人間にできようか。

しかしそれを目撃したカルルが信じないわけにはいかない。

暇つぶしも兼ねて、何か武勇伝の一つでも聞いてみたくなった。

「アカシアさん、そういうえば『戦神』ってすごい肩書きですけど。

なにをしたらそんなふうに呼ばれるんですか？」

いくらかの間を挟み、その問いにアカシアは軽い笑いを交えて答えた。

「なにをしたら、か。同じことをずっと繰り返しただけさ。戦神なんて響きは良いがあれはしにが」

「うわっ」

地面から顔を出した岩に車輪が乗り上げ、荷馬車が大きく撥ねた馬をなだめてカルルが呻き声に振り向くと、荷台で昼寝をしていたメーネが頭を打ったのか悶えていた。

「~~~~っ！」

「大丈夫か？」

アカシアがメーネの頭に手を伸ばす。

「さ、さわんないで」

「そんなこと言っている場合ではないだろう？ ほら、いいから」
半ば強引にメーネの手をのけ、その手が初めて獣の耳の間に触れた。

「……たんこぶになっているな。なら心配はなさそうだ」

「平気だよ……」

口では嫌そうにしているものの、もうその手を払おうとはしなかった。

「打撲を侮ってはいけない。以前、そこから悪魔が入って自分で腕を切り開いた奴がいた」

「悪魔……？」

「打ったところがものすごく腫れ上がって、激しい痛みだったそう
だ。だからそいつは悪魔を焼き殺すために短剣を火で炙ってな。こ
う、ぐりつと」

とりあえずカルルは耳に入らないように操舵に専念することにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6273w/>

草原の歌に花言葉を

2011年11月27日16時58分発行